

# 丹波マンガン記念館を訪ねて

下山 房雄

私はかつて、日朝協会『日本と朝鮮』紙上に10回前後のコラム連載を2度行なった。つまり日本の抱える朝鮮問題にそれなりの関心を持ちアンテナを張っていたつもりだったのだ。しかし、京都山奥の丹波に昭和の初めから1970年代までマンガン鉱山が300ほどあって、そこで当初は未解放部落の人たちが、続いて故郷から募集・徴用つまり強制連行でやって来た朝鮮の人たちが、苛酷な労働生活条件のもと働いていたこと、その鉱山のなかで最後に閉山(78年)した京北町の新大谷鉱山に、一朝鮮人が朝鮮植民地化の日本加害史跡として丹波マンガン記念館を建設し公開してきたことは全く知らないでいた。

その記念館の存在を教えてくれたのは、鹿児島国際大三教授解雇事件(教授会ルールに従って行われた教員採用人事の結果が学長の気に入らず、採用が取り消されたばかりか、選考過程の要職にあった3名の教員が02年3月に解雇された事件 昨08年3月に最高裁で解雇無効が確定したが未だ教壇に復帰できていない)支援で知り合った京都のある友人だった。だが残念なことに、その記念館が毎年500万円赤字などの経営困難の年を重ねて、この5月31日に遂に閉館という形でその存在を教わったのである。

5月31日、京都駅前を朝出発して、大型バスで1時間半の現地に赴く。「丹波の山奥」というがほんとに山また山だった。丁度この日の赤旗日曜版が京北町北隣の美山町を「たび」欄で紹介していた。そこに写真もある「切妻部分に千木をのせ、すそ広がりにつきおろされた」北山式入母屋造りの家が新緑の山の麓に折々現れる独特の風景の中を進む。

着いてまず、300メートルほどの坑道に入る。実際の採掘坑道は、三尺四尺の狭いものだった。それを記念館創立者で第一代館長(1989-95年)になる李貞鎬(ジョンホ 当時珪肺で入院中)の指示によって、息子で第二代館長を務める李龍植(ヨンシク)が高さ幅各2メートルに広げ、見学できるように改修したのである(写真参照)。ハッパをかけたたり手掘りしたり「耳かきで岩肌を削っていくよう」に進めた作業だった。

ヨンシクの友人から「李父子は少しおかしくなったのか」と思われながら、86年6月から3年がかり

で家族ぐるみで行った工事の一コマである。

資料館見学に次いで10時

半からの閉館式に参加。まずヨンシク館長の無念の閉館挨拶。彼の「ドイツでは1000カ所もある戦争加害史を展示する公立博物館が日本では1カ所もない」との指摘に、常々日本の戦後平和教育が被害史に傾斜して加害史直視が少なかったと考えていた私は大いに共感した。珪肺等で亡くなった丹波マンガン鉱山朝鮮人労働者を悼んで黙祷の後、金さん趙さん2人の女性による創作韓国舞踊が舞われる。そして新井英一のコンサート。大江山「酒呑童子」の演奏中に弦が切れる熱演。小雨ぱらつく中で始まり、日の光が木の間に差し込む中で終わった素晴らしいコンサートだった。

午後は近くの京都府立ゼミナールハウスで開かれたシンポ「丹波マンガン記念館の歴史を受け止め、これからの歴史に向けて考える」(主催・丹波マンガン記念館を再建する会)に参加した。鄭(京都コリアン生活センター理事長、田中(高校教諭)、安斎(立命館大学平和ミュージアム名誉館長)3氏の報告のうち、在日の鄭(チョン)さんが日本人の中国残留孤児には特別の措置をとって国民年金を支給するのに、在日の老人たちはいくら要求運動しても無年金のままという日本の行政の国籍差別の凄まじさの指摘に改めて考えさせられてしまった。

様々な知的美的欲求を充足して帰路につく。至便&料金割安で京都の宿舎としたアパホテルの部屋は、例の田母神論文1等入選の『真の近現代史観 懸賞論文作品集』とアパグループ・ボス元谷外志雄の極右史観の書『報道されない近現代史』が備付である。アパグループの全国ホテル室数は1万7千。左翼も一層頑張らなくては! 頑張って京都丹波の地に「革新自治体」をリバイバルさせ、公立マンガン記念歴史自然博物館建設を! (寄稿、元大学教授)

